NO・4（私の球歴）

古川百合

ナンバー・ワンと云ったら、とても信じて貰えないでしょうが、ナンバー・四なら半信半疑、つまり半分位は信じてもらえるでしょうか。「誰のことか」ですって？　勿論私のことなんです。私がNO・4だと云うのですよ。十年か十年少し前のことですが、武蔵野市の市民卓球大会の一般女子の部（註・老女の部ではありません）のトーナメント試合の第四シードに古川（西高）とちゃんとプリントされていました。「それでは出場選手は四人しかいなかったのか？」とんでもない。武蔵野市は卓球のレベルが高いのです。当日の一般女子の部の出場選手は大学生やOL合わせて二十数名だったと思います。私はびっくりして、次にスゴーク感激して、いつまでも、いつまでも、じーっとがり版刷りの出場選手名を見ていました。

「あの年でラケットをふりまわすとは感心だ。ああやって身を以って卓球の底辺を拡げているのだから、年に免じて、第四シードの栄誉を与えてやろう。」とでもいうわけだったのでしょうか。私は非常に感謝しました。だがまてよ――と、私は考えました。「出場して下手な腕前を御被露すれば、この名誉を与えて下さった方々に恥をかかせることになるのではないかしら。」などなどと、私は熟慮に熟慮を重ねた結果遂に出場を見

合わせました。しかし、この貴重な組合わせ表は、今でも大事に銀行の貸金庫の中に保存してあります。だって、「私が卓球をやったことがある」という唯一の証明書ですもの。

私は十年ほどH卓球場で練習していましたが、そこを合宿所とする某大学の卓球部員達からは「お上手」とおだてられ、西高のOB連中からは「運動神経麻痺」の診断を下されていました、どちらが本当かはもうお分かりでしょう。赤ん坊がよちよち歩けば、「あんよはお上手」と大人達がはやしてくれますね。それと同じことなのです。だから西高の部員達こそ私を自分達と同一のレベルに置いて評価してくれるのだと、有難く「下手」のお墨付を頂載して「お上手」の方を返上してきました。まあこういう次第で、私は卓球部の顧問と云っても、部員を育てたのではなくて、部員に育ててもらったようなものです。だから私は卓球部のOB・OGの方々——とりわけ私が卓球をやっていた頃在学していらした方々——をとてもなつかしく思い出しています。

どうぞ私のNO・4を信じて下さい。ただし、「NO」はナンバーと読んで下さい。間違っても、「ノー」なんて読むような語学力の弱い者は卓球部にはいなかったはずですね。

ではOB・OGの方々の御活躍を祈りつつペンをおきます。